No.83

一般社団法人 日本化学工業協会

Responsible Care NEWS

2016 秋季号

レスポンシブル・ケア®

VOICE

「ポリオレフィン」を通したパラリンピアンへの仲間意識

中央労働災害防止協会　理事長
八牧　暢行

読者の多くの皆様には当ニュース誌上で初めてご挨拶するにもかかわらず、尾籠な話で恐縮である。私の65年に及ぶ人生の初体験、それも人生観・価値観や命・健康・家族への思いの大きな転換点となった経験を通して、化学物質のRC（レスポンシブル・ケア）を実感したことを記したい。そこには化学の世界への感謝の気持ちがある。

2年前に受診した検診で唯一「※」がついたのがPSA（前立腺腫瘍マーカー）であった。その数値が本年春の再診で上昇、生検の結果、最低レベルながらも8分の3検体に腫瘍が判明した。健康優良を自認していただけに、まさに「ガーン！」であった。主治医曰く「選択肢は次の3つ。①摘出手術、②ホルモン治療、③放射線治療。年齢、進行レベル等を考えると手術がお薦め。やれば再発はほぼゼロ。ロボット駆使の最新鋭でやる」。医師の自信溢れる表情と丁寧な説明は、「信じる者は救われる」思いにさせてくれた。「まな板の鯉」の心境で手術室入り。麻酔が切れた時は全て終了していた。オペも術後も順調。医師の言行一致の技術と看護師の患者に寄り添うおもてなしに恵まれた。

しかし、この治療には術後しばらく不安に満ちたケアを余儀なくされる宿命が2つある。「男の自立力低下」と「水漏れ」である。前者は寂寥感があるものの、命の長らえを優先させたとの納得感がある。神経温存による復活への期待もまだある。現実問題としては後者のほうが懸念大であった。自己制御できない不甲斐無さ、年寄感、体裁の悪さ、痕跡が出た際の恥ずかしさ等々が脳裏をよぎる。時間と仕事は待ってくれない。恐る恐るだが、やってみるしかない。大・中・小、幅広・狭小、色柄多様。つまりパッドの世界である。選り取り見取りを試しながら、いつの間にかそれを楽しんでいる。最大のアッパレは匂い漏れがしないこと。この種の患者の早期復帰にとって、これ以上の贈り物はない。当然、その素材は一体何かに思いが至る。どの製品の包装にも「ポリオレフィン」の文字が記されていた。

今や、前立腺がんは、わが国がん発症率の高位にある。60歳を過ぎた男性の多くが括約筋劣化の予備軍である。たとえ健康長寿であったとしても、いや長寿となるからこそ、ポリオレフィンのお世話になる人は多いはずである。化学の世界の皆様には当たり前のRCが私には神や仏に近い崇める存在となった。

貴日本化学工業協会の活動を学ぶにつれ、共感・共鳴を強く覚えたのは、「安全」、「衛生」、「人の健康」の確保・向上を核とされていることが随所に滲み出ていたことであった。その姿勢の象徴とも言えるのが、RCと理解した。そこには、企業経営における「安全第一」を強く訴え、その啓発と実践に努めている私ども中央労働災害防止協会が目指すものと同じベクトル上にある。

ポリオレフィンのお陰で、回復は順調な一途を辿っているが、それでも病み上がりならではの心の萎えを感じていた。そんな時、リオデジャネイロパラリンピックの開会式の映像で、入場する選手の弾けんばかりの笑顔と輝く眼差しを目にした。彼らは実に凄い。大きな叱咤激励をいただいた。そして思った、彼らの超人的な気力・身体能力の支えに必ずやポリオレフィンがあると。パラリンピアンに対し、敬意とともに仲間意識が高まった。

ICCAとUNEPによる持続的発展に関するワークショップ開催

2016年9月11日から13日にかけて中国の上海で、ICCA(国際化学工業協会協議会)とUNEP(国連環境計画)の共催で持続的発展に関するワークショップが開催されました。ワークショップは9月13日～14日に開催された日中化学産業会議に先立ち、そのサイドイベントとして開催されましたが、ICCAとUNEPとの共催ということもあって、参加者はアフリカや南米、アジアから多数に上り、一方、グリーンピース等NGO、NPOも主要メンバーとして参加し、必ず彼らにも発言の機会を設けるなど平等性を重視した進行の仕方で国連の多様性を感じました。

ワークショップは9月11日午後開始。最初に開催場所を代表してCPCIF(中国石油・化学工業連合会)の李寿生(Li Shousheng)氏による歓迎スピーチとUNEP/Achim Halpaap氏、ICCA/Cal Dooly氏による挨拶の後、初日午後のセッション1では3つのパネル討論が、2日目午前中のセッション2では行政・産業界・その他の3グループに分かれ、それぞれの現状の問題点を挙げて議論するグループディスカッションがあり、同日午後は中小企業・バリューチェーン・発展途上国の3分野に分かれてのワークショップがありました。最終日は前日のワークショップのまとめ、及びハイレベルレビューと称し、BASF取締役のSanjeev Gandhi氏、UN/Exective SecretaryのRolph Payet氏の2人の基調講演があり、続いて国連のUNIDO(国際連合工業開発機関)等によるハイレベル・ラウンドテーブル・ダイアローグがあり、各人の今後に向けた所信が述べられました。

日本化学工業協会からは庄野常務以下3名が参加し、それぞれが分かれてワークショップの各セッションに参加しました。2日目午後の「バリューチェーンを通じた化学物質情報の共有」と題したセッションでは化学品管理部の徳重氏が「自動車業界と化学産業の協業」について事例発表しました。

徳重氏による発表

最終日のクロージングでは、CeficのMarco Mensink氏より多様なステークホルダーと会話できたことに対する御礼、及びUNEPのChemicals and Waste BranchのHead, Achim Halpaap氏より、「今後、環境・社会・経済をサスティナブルに運用していくには、技術革新・創造・変革が重要である。発展途上国も含めた国家間・バリューチェーンを含む業種間・各種業界団体・NGO・NPO・中小企業等との連携・協業が不可欠であることが重要で、そのためにはSAICMの2020年目標の達成に留まらず、2030年を目指したSDGsの達成を視野に、更なる教育・コミュニケーション・イノベーションが必須であり、各分野の主体間連携を中心とした柔軟で統合的なアプローチが有効である。今回参加された方は、必ず本ワークショップで共有したものを持ち帰り、将来に向けた協業作業に生かしていただきたい。そして、将来に向けて我々のグローバルなパートナーシップをさらに育み発展させていこう」というポジティブなメッセージが参加者へ投げ掛けられ、拍手をもって閉会しました。

RCIPの展開
（Responsible Care Integrated Program）

2014年からスタートしたRCIP活動は「ASEAN各国の急速な経済成長と一層の自立に向けた動きの中で各国協会と良好な関係を保ちながら“頼られる日化協”を目指すと共に、日系企業にとって良好なビジネス環境の醸成に寄与する」ことを目的にそれを達成するための方策としてASEAN各国の現地協会と日化協との信頼関係に基づく現地に根を張った支援活動を展開しています。

本年夏号で紹介したRCIP活動の一環として実施されたタイでのプロセス安全のワークショップに引き続き、9月下旬から10月上旬にかけてインドネシア、ミャンマーにおいてもワークショップを実施しました。またワークショップ開催時にその前後で現地日本商工会議所、在ASEAN日本国大使館及び現地レスポンシブル・ケア協会等を訪問し、情報交換を実施しています。さらに今回は、ベトナムにおいて産と学の交流の試みとして現地大学とのセミナーに参加し、日化協の活動内容について紹介しました。

1．プロセス安全ワークショップ

1－1）インドネシア

ジャカルタにおいてRCI（インドネシアRC協会）主催の今回が3回目となるプロセス安全ワークショップが9月28日、29日の2日間開かれ、約50名の参加者があり、非常に盛会でした。ワークショップではRCIのチェアマンSuhat Miyarso氏により開会の挨拶が行われ、続いて日化協のASEAN地区におけるRCIP活動の取り組みの紹介を行いました。その後の日化協による各講義に対しては活発な質疑応答が行われ、演習等を通じて参加者のレベルを確認することもできました。その結果から高いレベルの管理者層が参加していることがわかりました。今回各講義にすべて演習を組み込んでおり、さらにグループディスカッション等参加者が直接参加できる形式をとり非常に好評を得ることができました。

また2日目には、インドネシア国営のアンモニア・尿素製造工場を見学しました。先進国の基準を取り入れ、しっかりした安全管理が行われていました。

今回のワークショップでは日化協のロゴ、RCのロゴに並んでRCIPのロゴも掲げられ、この活動が周知されつつあることが伺われ、アンケートにおいても、ポジティブな意見が多く活動の方向性には間違いはないと確信しました。今回3回目のワークショップを終え、いよいよRCIPが目指すスキーム（トレーナートレーニングにより訓練された国内トレーナーが現地語でのトレーニング活動を行う）の確立に向けて、RCIと密接なコンタクトを取りつつ最適なプログラムを考えていくタイミングであると考えます。

1－2）ミャンマー

ミャンマーのMRCC（ミャンマーRC協会）責任者WinHtin氏の強い要請に応え2014年に続いてのワークショップ開催となりました。

インドネシア　プロセス安全ワークショップ参加者

ミャンマー　プロセス安全ワークショップ参加者

化学産業そのものはASEANの中でも決して高いレベルとは言えませんが、それと対照的に、MRCC会員企業の安全管理レベルが非常に高く、また大変熱心であり、一旦演習に取り組むと昼食時間にかかってもなかなかやめないくらい真摯に取り組んでいました。日本人にとっては理解しやすい国民性であると感じました。

MRCCの活動も驚くほど活発で幅広く、国連でLDC(後発開発途上国)に分類される国とは思えない面がありました。現地企業の安全活動の紹介においても実施項目の羅列に終わるのではなく、実際に蓄積した現場データに基づいた活動の紹介であり、説得力のあるものでした。今回訪問したUnited Paint Group(UPG)は現地40数社が共同出資した生粋の現地企業であり、MRCC創立以来の活動の中心企業です。活動の内容ではいたるところに日本式が散見され、かつてJRCCの支援を受け、それが実を結んだ成果だと思います。実際にきめ細かい安全活動が日本の企業のそれに匹敵するところも多く見受けられました。このUPGと2014年に訪問したTOYOバッテリーがMRCCのモデル企業であり、リスクアセスメントの同業者への指導等、RCの理念を体現しつつあります。

しかしながら、全体的にはミャンマーにおける化学産業は発展の途についたばかりであり、長期的な展望でRC支援を進めていく必要があります。日本のノウハウを多く取り入れ、日本に非常に好感を持っている現実も考え、これらモデル企業を中心に持続的な支援のあり方の検討を進めていきます。

2．関係各所との情報交換

日化協が実施しているRCIP活動に基づくワークショップ開催の前後を利用して、現地各機関を訪問し、現地情報の聴取及び意見交換を継続しています。

訪問先として、現地日本国大使館、現地政府商工省等、現地RC協会、さらにJICA、JETRO、現地日本商工会議所があげられます。

各機関から他の機関が実施している支援の状況や現地が必要とする環境安全に関する支援の情報さらには懸念されている点等、様々な点で意見を交換しています。その結果、各機関との繋がりを持つだけでなく、各機関と連携することにより、オールジャパン体制の重要性を共有し、RCIP活動のさらなる展開を考えています。

ミャンマー　プロセス安全ワークショップ風景

バンコク日本商工会議所共催講演会

そのひとつの成果として、タイにおけるバンコク商工会議所(JCC)との共催の講演会があります。海外における日化協のRCIP活動を広く日系企業の皆様に知っていただくよい機会でした。

こうした情報の聴取及び意見交換により、ASEAN全体で環境安全にかかわる活動が如何に実施され、どこと協同できるか、どこが鍵となる部署か等の情報を得、RCIP活動がさらに効果的な活動になるよう鋭意進めていきます。

3．海外における産と学との交流

横浜国大がベトナムダナン大学との合同セミナーを実施するに当たり、日化協としても、産と学の情報交換の場と捉え、また化学企業の安全活動を大学の方々に紹介できる機会と捉え、参加しました。

ダナン大学には、横浜国大の安心・安全センターの拠点があり、安全に関する交流を継続しています。このセミナーの場において日化協のASEAN地区で実施しているRC支援活動及び産業の立場からの安全について説明を行いました。

その後の意見交換の中で、ダナン大学からは、将来的には日化協が考える産業界とのコラボレーションが考えられ、また、今後ともセミナー等で実際の現場における安全に関する知識についての情報はぜひとも提供してもらいたいとの意見が出されました。現地ベトナムのRC協会(VRCC)含め、次のステップへと活動を進めていきたいと考えています。

横浜国大・ダナン大学交流セミナー

平成28年度 岡山地区会員交流会

10月25日、倉敷国際ホテルにて岡山地区会員交流会が開催されました。

まず、第10回RC賞受賞講演として、優秀賞2件〔お客様に満足頂ける物流安全と品質を目指して～従業員同士での共育活動～(ダイセル物流株式会社)、市原工場地域社会への貢献活動(三井化学株式会社)〕についてご発表いただきました。分科会では5つのテーマに分かれ、活発な意見交換が行われました。また日化協からは、RCについてのプレゼンテーションを行いました。

▲講演風景

▶日化協・高瀬氏によるプレゼンテーション

分科会内容

(1) 物流安全(運転者教育)[参加者5名]

座　長：木原　伸一(三菱化学物流株式会社)
副座長：勝又　信宏(株式会社ダイセル)

討議概要

各社の物流安全の方針や目標、運転者教育の実態、抱えている課題を共有化しながら、活発な意見交換を行いました。

分科会のまとめとして、①物流安全の方針や年度目標は、現場の作業者一人ひとりが取り組む目標に落とし込まれているような企業文化の構築が必要であること、②ゼロ災継続のためには、運転手任せではなく、荷主と物流協力会社が一体となった取り組みが不可欠であること、③化学品や輸送設備の取り扱いなどに関する教育体制を充実させる必要があり、その教育指導者は自分の苦い経験を通じて腹を割った話ができないと伝わらないこと、④仕組みとして、協議や工夫による安全職場の風土を一緒になって実現していく思いを関係部署と共有する必要があることが確認されました。

(2)社会との対話(地域への貢献)[参加者7名]

座　長：長友　裕三(旭化成株式会社)
副座長：平井　宗男(旭化成株式会社)

討議概要

分科会に先立ち、各社で実施している特徴的な取り組み、重点項目、悩み・課題等について事前アンケートを実施し、また平成28年度RC優秀賞の「地域社会への貢献活動」の講演内容を参考に、行政との連携、近隣住民の方々およびそれ以外の一般の方々とのコミュニケーションについて、意見交換を行いました。

各社の取り組み事例やメンバーの経験談から、行政との連携の場は企業側からの積極的な要請が必要であること、またコミュニケーションの方法は地域性があり、その地域の特徴や歴史も踏まえた取り組みが必要であることの情報共有を行いました。具体的な会議体や地域広報誌の紹介も行われ、今後の各社の取り組みの参考になり、有意義な分科会となりました。

(3) 保安防災(BCPへの取り組み)[参加者6名]

座　長：鶴﨑　英樹(三菱化学株式会社)
副座長：野﨑　貴之(住友化学株式会社)

討議概要

大地震(南海トラフなど想定)や津波に対する各社の取り組みについて情報交換を行いました。主なトピックスは以下のとおりでした。

・災害対策本部は、毒性ガス襲来を想定し代替建屋を用意すべきではないか。
・IDカードタッチで構内業者や来訪者の安否報告が簡単にできるシステムの事例あり。
・発災部署は、問合わせに都度回答するのではなく、構内放送で積極的に情報発信する。
・備蓄物資として、トイレットペーパーは十分な量が必要。
・BCPに関して、原料供給を確実にするため2社購買化に取り組んでいるが、品質に影響するケースもあるため、事前評価が必要。また、装置復旧のための工事業者の招集と、彼らの宿泊先の手配に苦労したという話もあり。

(4) 環境保全(廃棄物削減)[参加者7名]

座　長：豊原　秀史(日産化学工業株式会社)
副座長：幸尾　保高(三菱レイヨン株式会社)

討議概要

本分科会では各社の産廃削減の取り組みについての意見交換、情報交換を行いました。話し合った具体的内容は、①各社の廃棄物処理のゼロエミッションに向けてのリサイクル・有価物・処理困難物の処理方法について、②各種廃棄物処理業者の情報交換・情報収集方法について、③各社のPCB処理状況や排出事業者確認状況について、④放射性廃棄物、PCB含有顔料の廃棄物、水銀製品廃棄物の特殊な廃棄物の廃棄方法などです。

参加者メンバーの大半が事業所・工場からの参加者であったため、テーマ自体が担当者の業務と直結していました。そのためメンバー全員から活発な意見交換、情報交換が行われ、有意義な分科会となりました。

(5) 労働安全衛生(安全風土の醸成)[参加者8名]

座　長：浅沼　大右(日本曹達株式会社)
副座長：鶴岡　義博(日産化学工業株式会社)

討議概要

事前に実施したアンケートの結果を共有し、参加者の関心が高かった安全風土の評価系をはじめ、相互注意(コミュニケーションの充実)、安全意識の底上げのための教育に関するテーマで意見交換を行いました。

安全風土の評価系では独自システムで評価している会社、外部の評価機関を利用して評価している会社があり、それぞれの取り組みや課題の紹介がありました。その他のテーマでも各社の取り組みや悩みが紹介されましたが、地道に安全意識の向上に向けた活動を継続する重要性を認識することができました。

各社の安全風土の醸成に向けた取り組みについて、活発かつ有意義な情報交換ができた分科会となりました。

RCの現場を訪ねて

新日鉄住金化学株式会社
九州製造所

事業所の概要

新日鉄住金化学株式会社九州製造所は、1956年に旧八幡製鉄株式会社の化工部門から分離独立し、コールタール蒸留を中核とした製鉄関連事業で成長し、ビスフェノール設備やフレキシブルプリント基板となる電子材料へと事業を拡張してきました。北九州市北西部埋立地の堺川泊地沿岸北部一帯の約50万㎡の敷地の中で、総合研究所を含め、従業員・協力会社をあわせ約1,000人が勤務しており、現在は有機ELデバイスや燃料電池材料分野の事業展開も図っています。

製造所全景

北門

レスポンシブル・ケア活動

当社は、「高度な化学技術を自ら育成蓄積し、素材の高度・高効率利用を通じて、地球環境に貢献し、人々の暮らしを豊かにする製品・サービスを提供する。」の基本理念の下、レスポンシブル・ケア活動に取り組んでいます。

〈労働安全衛生〉

完全無災害達成の継続を目標に、労使協一体となった安全活動に取り組んでいます。グループ会社を含め、「安全ルールの不徹底が災害発生の主要因である」との認識の下、基本動作徹底として指差呼称や相互注意を推進しています。また、技術の伝承、作業手順やルール設定の背景を理解させることを目的に、「技術標準書・作業標準書へのKnow Why追記活動」を展開しています。

更に、現場とのコミュニケーションを良好に保つことをねらいとして、製造所長自らが先頭に立ち、現場作業者との対話やパトロールを実践するなど、積極的に危険有害要因の早期すくい上げや改善に取り組んでいます。

〈保安防災〉

火災、爆発、漏洩等の「重大設備事故ゼロ」を産業保安に関する目標に掲げ、「設備の維持管理強化」、「工事中防災管理の徹底」、「保安防災力の向上」、「大地震／津波対策の整備と強化」を4つの柱として対応に取り組んでいます。中でも、事故発生時の実動に即した防災・通報・緊急停止・退避各訓練を行うための、「シナリオなしでの訓練」、「自衛消防隊による夜間訓練」、「消防署との合同訓練後に指導を受けた改善事項を次回に反映させるPDCA活動」を推進しています。また、津波への対応として、指定時間内での指定場所への退避、安否確認まで行う訓練を直協一体で定期的に実施しています。

防災訓練

建屋の耐震強度については、有人建屋については改良を終え、無人建屋について今期から改良に着手しています。

〈環境保全〉

九州製造所の環境方針に基づきISO－14001システムを活用した「廃棄物の3R」「省エネ・省資源」および「化学物質等の環境負荷低減」について継続的な改善に取り組み、地球に優しい低炭素社会への実現を目指しています。特に汚泥や廃プラスチック類のセメント原燃料化によるリサイクルや回転炉耐火煉瓦屑の汎用煉瓦へのリユース等を促進した結果、2015年度実績でエミッション率を1.0％に改善することができました。また、新日鐵住金株式会社八幡製鉄所構内各社とともに、「戸畑環境連絡協議会」に参画し、行政や地域住民とのコミュニケーションを図りながら、社会貢献を果たすことで「信頼される製造所」を目指しています。

地域とのコミュニケーション

10年以上前から、毎年7月に、地域、労働組合、会社の共催による夏祭り『サマーナイトフェスティバル』を近隣の小学校にて開催しており、地域住民との交流を深める行事として定着しています。

サマーナイトフェスティバル

信越化学工業株式会社

群馬事業所

事業所の概要

信越化学群馬事業所は、群馬県西部の安中市に位置し、磯部工場、松井田工場、郷原分工場、横野平分工場の4工場とシリコーン電子材料技術研究所、精密機能材料研究所の2つの研究所、および関連企業で構成されています。1953年に初めて国産技術によるシリコーンの工業化に成功し、その後さまざまなシリコーン製品を開発してきました。またこの過程で培われた合成・精製技術をベースに有機材料、機能材料などの分野にも展開し、高機能・高品質な製品を生産しています。

主な生産品目は、主力であるシリコーンの他に電子デバイスの封止材、半導体や液晶の製造に使用されるペリクルやセラミック成形品、さらには酸化物単結晶や液状フッ素エラストマーなどで、現代の生活に密着した製品の開発と生産の拠点となっています。

事業所全景

レスポンシブル・ケアの取り組みと主な活動

「保安防災」

群馬事業所では「安全第一」をモットーに、過去に経験したトラブルの再検証、製造工程における異常事態の想定と対策の見直しなどを行い、万一にも事故を起こさないよう安全活動を行っています。一方で、不測の事故や近年危惧されている大規模地震などの自然災害を想定して、事業所総合防災訓練を春と秋の2回行っています。秋の訓練は消防署と共同で行い、その際には行政関係者や地元住民の代表者の方にもご参加いただき、当事業所の緊急時の対応を知っていただくことで地域の安全安心につなげられるように取り組んでいます。

防災訓練

「環境保全」

当事業所は1996年に、化学業界ではいち早くISO－14001の認証を取得し、温暖化ガスや廃棄物の削減などに挑戦的な目標を掲げ取り組んできました。コジェネレーションの導入や重油から天然ガスへの燃料転換、プロセスの改善を行い温暖化ガスの排出量原単位は、1990年比で57％の削減を達成しました。また、利根川水系の上流に位置することから、工場排水を河川に放流する際には浄化処理を行うと共に、水質の管理を徹底しています。水処理設備の運転状態を常時モニタリングし、常に最適な状態に保つように努めています。定期的に放流水を分析し、高い水準で基準を順守していることを確認しています。

「労働安全衛生」

従業員の安全、衛生、設備保全に関するスキル向上を目的に、場内の安全研修センターで体験学習を交えながら、教育を行っています。講師は前回の受講者が務める形を取っていて、講師と受講者の双方がより理解を深められるようにしています。また、挟まれ・巻き込まれなど、いわゆる行動災害を防止するための活動として、ヒヤリハット気掛かり提案、リスクアセスメントなどを行い、活動状況は定期的に内部監査で確認し、良好な取り組み事例は事業所全体に展開して、安全・衛生レベルの向上に努めています。

地域とのコミュニケーション

地域社会に密着した活動として、春と秋の工場周辺道路の清掃、通学児童の交通補導、事業所見学を希望する学校の定期的受け入れなどを行っています。事業所見学では、化学の面白さを伝えると共に、安全、環境などへの取り組みを説明して、当事業所の理解につなげられるよう努めています。また、安中市では毎年5月に安政遠足(とおあし)侍マラソンが開催されます。日本のマラソンの発祥とされ、ランナーが仮装して走ることでも知られていて、全国から参加者が訪れる風物詩となっている大会です。当事業所はこの大会に協賛すると共に、従業員も多数参加して大会の盛り上げに一役買っています。

安政遠足(とおあし)侍マラソン

リスクコミュニケーション研修

レスポンシブル・ケア委員会では毎年1回、東京地区と大阪地区で交互にリスクコミュニケーション研修を開催しています。

本研修は、化学コンビナートを中心とする国内15地区および個別地区で開催している地域対話において、参加者（地域住民、行政、NPO法人等）に化学企業が地域住民の安全と環境を守るために実施している取り組みの内容をいかに分かりやすく説明するか、質問に対しどのように答えれば理解してもらえるかを学ぶ研修です。

今年は、9月26日、27日に、地域対話を計画している会員企業からの参加者を含む25名が参加して大阪（クロス・ウェーブ梅田）で開催されました。研修の概要は以下のとおりです。

セッション1「リスクコミュニケーション概論」

上智大学大学院・地球環境学研究科の織朱實教授より、「リスクコミュニケーション概論」の講義があり、対話の基本的な理論と種々の具体例について学びました。

セッション2「ステークホルダーの関心を知る」

4つのグループ（A．化学物質排出、B．大規模地震・津波対応、C．臭気問題、D．保安防災）に分かれ、それぞれの課題について、自分が周辺地域住民の立場（会社員、主婦、農家、公務員等）で工場に対して聞きたいこと、日ごろ疑問に思っていること等を各自書き出して模造紙にグルーピングして整理・発表し、織先生からのコメントをいただき次の日に備えました。

セッション3「メッセージの作成」

前日まとめた関心事に答えるためのプレゼンテーション資料を作成しました。ここまでが、模擬住民対話集会に向けた準備になります。

セッション4「模擬対話」

グループ毎に、司会者、工場長、説明者、外部有識者等の役割で発表しました。発表しないグループは対話参加者になりきってそれぞれの立場で種々の質問を行い、発表者はそれに答えるという形で進め、1ラウンド4グループ、3ラウンド計12回の模擬対話を、役割を変えて行いました。ラウンド毎に織教授から良かったところ、改善すべきところについて細かなコメントがありました。また今年は、コンシューマーズ京都の右近裕子さんにも加わっていただき、消費者目線でのコメント、アドバイスを多数いただきました。

ラウンドを重ねていくにつれ、これらのコメント・アドバイスを生かして発表や受け答えが的確になっていきました。

これらの模擬対話演習はDVDに記録して研修終了後参加者に配布され、研修後に受け答えの様子が確認できるようになっています。

参加者の研修後の感想とアンケート結果を紹介します。

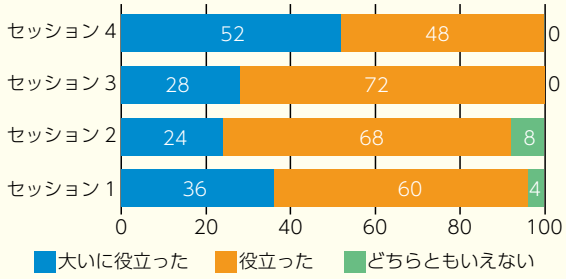
セッション1：経験談等を交えながら、また具体例もあり大変分かりやすかった。難しい局面での対応方法や会議の進行方法などにも理解が深まった。

セッション2：相手の立場での質問を考えたが、なかなか企業側の考えが抜けず難しかった。自分には思いもよらない様々な発想を教えられた。

セッション3：他社の方の情報も聞け、プレゼン資料作成、ファシリテーターの進め方が理解できた。

セッション4：いろいろな立場で対話トレーニングができて良かった。分かりやすい言葉で説明する大切さを学べて良かった。客観的かつ実践的に実習でき、大いに役に立った。

研修アンケート結果



第6回　四日市地区地域対話

2016年10月14日(金)午後、四日市市の結婚式場ザ・グランドティアラ千寿にて、第6回四日市地区地域対話が開催されました。参加者は、地元の自治会、行政(四日市市)、学校(三重大学、四日市中央工業高校)、企業等から総勢233名と多くの方々にお集まりいただけました。

四日市地区地域対話は約11年間の中断の後、2015年2月に再開されました。そして今回の開催により、他地区の地域対話と同様、隔年開催のペースとなりました。化学企業への理解を地域において深めるこの活動が、本地区でも定常的に推進される運びとなったことは、大変意義深いと考えます。

対話の開始前に、まず、地域の方々を中心に39名の参加で四日市第3コンビナートのバスツアーを実施し、工場見学をしていただきました。現在の工場の様子を直に見ることができ、好評でした。

対話の会合は予定通り14時30分から開始され、代表幹事の東ソー㈱の開会挨拶に続き、来賓の塚田四日市副市長よりご挨拶を賜りました。副市長より「四日市には公害問題の過去があるが、公害裁判で敗訴した企業がそのまま判決を受け容れ上告しなかったことに感銘を受けた」との有り難いお言葉をいただき、さらには「地域一体となって問題を克服し、四日市に青空を取り戻した歴史を後世に伝えていく」と話されました。

今回のメインテーマは安全・防災でした。「レスポンシブル・ケア活動とは」と題した三菱化学㈱からの説明に続き、四日市市危機管理室より、「家族防災手帳」をテーマに講演をいただきました。手帳の実物が全員に配布され、市民レベルでの防災を強力に推進する市の意志が伝わる講演でした。

続いて、安全・防災を中心とした2件の企業発表が、三菱ガス化学㈱とDIC㈱から行われました。断片的な事例紹介ではなく理念や方針も示され、写真を多用したビジュアルな内容であり、分かり易い発表でした。会場の地域の方々からの質問も活発で、安全に対する地元の関心の高さが伺えました。

次に、四日市中央工業高校の化学工学研究部と理科部より、環境や化学をテーマにした様々な活動を発表していただきました。学校紹介の後、水生生物の生育と水質の関係の研究、植物栽培によるグリーンカーテンの作成、ポリ塩化ビニル等の素材からの消しゴムの作製他の発表が行われました。高校生のフレッシュなプレゼンテーションから、未来に対する心強さを感じました。四中工のロゴ入り消しゴムを休憩時間にいただくこともできました。学生の皆さんに感謝すると共に、指導されている先生方にも敬意を表します。

三重大学の川口准教授からは、「大規模災害に備える」と題して、南海トラフ地震への対策について説明をいただきました。「海外からは、地震列島の日本が文明を絶やさなかったことに対し敬意を持たれている。人間としての生きる力を育み、防災・減災を文化として当たり前に続けていくことを目指そう」という文明論にも近い安全・防災のご講演でした。先生はこの後、自治会、行政、企業が登壇したパネルディスカッションのファシリテーターも担当され、具体的な意見を引き出された後、「それぞれの立場に対応した縦割りの対策作りと、となりに口を出すおせっかいも焼いて、地域を良い方向に向かわせよう」という独特の分かり易い表現でディスカッションをまとめられました。素晴らしい内容に感謝します。

この後、御礼の挨拶が日化協RC推進部の平岡部長より、閉会の挨拶が次期代表幹事の三菱ガス化学㈱から行われました。会場からまだ質問し足りないという意見が出るほど、盛会のうちに対話を終了しました。

意見交換会(懇親会)は別フロアの会場で開かれ、多くの方が引き続き参加して議論が行われました。質問し足りないと言えるオープンな雰囲気が、四日市地区では作られています。今後ともこれを土台に更なる対話の充実を図っていければ、と考えます。

会場全景

パネルディスカッション風景

「ケミカルリスクフォーラム導入編」を倉敷で開催

日化協では、公益社団法人山陽技術振興会のご後援のもと、2016年9月30日(金)に岡山県倉敷市において「ケミカルリスクフォーラム導入編」を開催しました。

当協会では、化学品管理の実務者の養成講座として、2008年より「ケミカルリスクフォーラム」を運営し、リスク管理のための広範な専門知識や技術の習得の場を提供してまいりました。現在、本講座を受講された多くの方々が自社製品のリスク評価および化学品管理業務に携わっておられます。

また、当協会では2015年より各企業における化学物質管理業務の新任の方や化学物質管理業務に新たに取り組もうと意図されている企業の方々を対象に、広く化学物質管理に関する基礎知識を身につけていただく場として「ケミカルリスクフォーラム導入編」を始めました。これまでに東京、大阪、千葉にて計5回開催し、いずれもご好評をいただきました。この活動を都市部に限らず地方に展開するべく、今回初めて岡山県倉敷市で開催し、岡山、広島などの山陽地区や四国地方を中心に約20名の方々にご参加いただきました。現地事業所の化学品管理業務に関心のある方が多く参加され、参加者は熱心に聴講されていました。

今回は、化学物質管理の概要、リスク評価の手法と実践について、各種ツールのご紹介とデモを行いながら右記のようなプログラムで講義を行いました。特に、GHS(化学品の分類および表示に関する世界調和システム)に基づくラベル対応、SDS(安全データシート)のリスク評価への活用、JCIA BIGDrの紹介、改正労働安全衛生法への対応などについて詳細に説明を行い、講義内容に対して参加者の方々より活発に質疑が行われれました。

日化協では、今後も導入編を都市部に限らず、工場近隣地域、地方での開催も計画し、日化協会員企業様はもちろん、非会員企業様からも参加を広く募り、化学品管理に関する知識の普及に努めてまいります。

講義風景

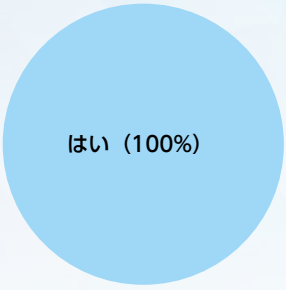
講義プログラム

1. 化学物質管理入門
2. リスク評価手法と管理の概要
3. 化学物質のリスク評価と管理の実践
   - 3－1. 化学物質の危険有害性情報 －GHSの基礎－
   - 3－2. リスク評価支援サイト JCIA BIGDr（ビッグドクター）－ご紹介と活用法－
   - 3－3. 改正安衛法への対応 －リスク評価の実例－
4. 化学物質管理に関連する法規制

今回参加者のアンケート結果

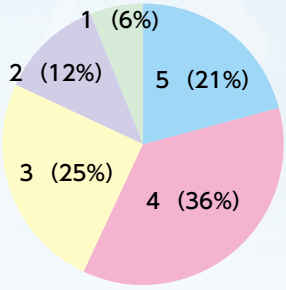
以下のとおり、ほとんどの参加者の方に好評でした。

問1 今後の業務に役立ちそうですか？



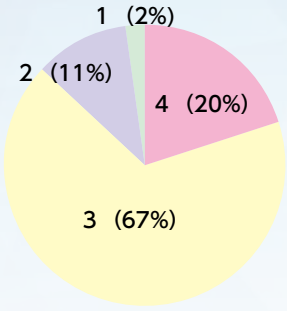
回答
はい
いいえ
わからない

問2 新しい情報はありましたか？



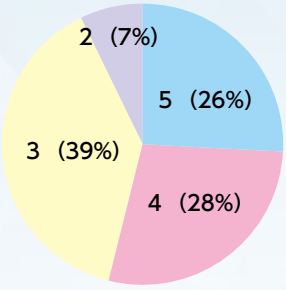
5段階評価：
5：大いにあった
4：3と5の中間
3：まあまああった
2：3と1の中間
1：なかった

問3 説明はわかりやすかったですか？



5段階評価：
5：難解すぎた
4：3と5の中間
3：丁度よかった
2：3と1の中間
1：簡単すぎた

問4 受講した目的・動機と合致していましたか？



5段階評価：
5：ピッタリだった
4：3と5の中間
3：まあまあ合っていた
2：3と1の中間
1：違っていた

「改正安衛法対応 リスクアセスメントセミナー」開催

日本化学工業協会では、化学物質の管理に従事している責任者、担当者を対象として「改正安衛法対応リスクアセスメントセミナー」を開催しています。本年6月1日から施行された改正安衛法では、640の特定の化学物質を使用する全ての事業者に作業者リスクアセスメントの実施を求められています。そのため化学物質のリスクアセスメントに詳しくない事業者からリスクアセスメントについて学びたいとの要望が強くなっています。これらの事業者は、日化協の会員以外であることが多く、化学物質のサプライチェーン全体での化学物質の安全性情報の共有化を促進する日化協の活動（GPS・JIPS）の一環として、日化協非会員も対象とし、本セミナーを企画しました。

一日のセミナー受講により、化学物質のリスクアセスメントを行うことを可能にすることを目的とし、包括的かつ実際的な講義内容となっています。

本セミナーは公共性、有用性が認められ、厚労省の「後援」事業に認定されています。

（セミナーの基本方針）

◆2016年6月1日に施行された改正安衛法についての概要、対応すべき事項を学ぶ。
◆化学物質の適切な管理について、基本的な考え方を理解する。
◆リスクアセスメントの方法を学び、リスクを見積もる有用な支援ツールの使い方をマスターする。

（特長）化学物質の管理を即実践可能にする充実した講義内容

・支援ツールを開発運営している4人の専門家講師陣が作成した教材を使用し、講師本人が講演を行う。
・全国10箇所での開催
　仙台、東京（2回）、川崎、静岡、名古屋、大阪、広島、博多、富山
・東京で追加のセミナー開催を決定

（講義内容）

◆改正安衛法の改正点の概要、対応事項
◆化学物質の適切な管理の基本
◆リスクアセスメントの基礎
　爆発危険リスク、有害性リスク、リスク評価法の説明
◆即実践使用可能なリスク支援ツール
　・火災爆発危険リスク評価支援ツールの使い方
　・有害性リスク評価支援ツールの使い方：日化協BIGDr. Worker
　・有害性リスク評価支援ツールのパソコンでの実演

（活動状況）

これまでに下記のセミナーが終了しました。

- **第1回（7月14日、川崎）49名**
  （参加率98％：会員19名＋非会員30名）
- **第2回（7月29日、大阪）63名**
  （参加率100％：会員23名＋非会員40名）
- **第3回（8月1日、東京）70名**
  （参加率100％：会員25名＋非会員45名）
- **第4回（9月7日、静岡）40名**
  （参加率100％：会員8名＋非会員32名）
- **第5回（9月8日、名古屋）40名**
  （参加率100％：会員4名＋非会員36名）
- **第6回（10月3日、仙台）29名**
  （参加率100％：非会員のみ　29名）
- **第7回（10月28日、東京）79名**
  （参加率98％：会員21名＋非会員58名）

第2回：大阪

第3回：東京

第6回：仙台

（参加者の感想：アンケートの結果から）

どの回も参加率が高く、日化協の会員以外の参加者が多いのが特徴です。参加者は熱心に聴講され、また、Q＆Aの時間を超過する程多くの質問が出されています。

川中、川下企業：講演内容の項目が網羅され、安衛法対応に関して概観でき有用。

現場安全担当者：火災／爆発危険のリスク評価法の解説は他のセミナーにはなく有用。

化学品リスク管理担当者：作業者リスク評価支援ツール“BIGDr.Worker”の説明が有用。

（全ての回で、参加者の80％以上が“BIGDr.Worker”の職場での導入／活用を図りたいと答えています。詳細な使い方の追加のセミナーを開催して欲しい等の要望が出ています）

（今後の予定）

今後も全国各地での開催を予定しています。セミナー会告、および申し込みは、以下のURLからアクセスしてください。

第8回：12月1日（木）博多
第9回：12月2日（金）広島
第10回：1月17日（火）富山
第11回：1月23日（月）東京

BIGDr.セミナー会告ページ
http://www.jcia-bigdr.jp/jcia-bigdr/anei#seminar

日本最大級の“化学の祭典”「化学の日・子ども化学実験ショー2016」を開催しました！

夢・化学－21委員会が、毎年「化学の日」「化学週間」の関連イベントとして開催している「化学の日・子ども化学実験ショー」が、今年も京セラドーム大阪スカイホールを会場に10月22日(土)～23日(日)の2日間にわたり開催されました。

3回目となるこのイベント、すっかり浪速の街に根付いたようで、今年は過去最高となる7,300名もの親子連れにご来場いただきました。特に、23日には朝早くから京セラドームの外周に長蛇の列ができるほどの大盛況となり、化学実験を体験できるイベントとしてはまさに日本最大級、さすが大阪！会場は終日活気につつまれ大賑わいとなりました。

今回の実験ショーには化学企業10社のほかに近畿地区の大学・高校・中学などの教育界からも10団体が参加し、過去最高の20種類の実験が揃い、大学生や高校生が子どもたちを相手に一生懸命実験を教えたりサポートしたりする姿は清々しく、子ども化学実験ショーの長い歴史の中でもひときわ新鮮で、まさに産・学協働の大イベントとなりました。

予想を上回る人出のため、事前予約制の実験の整理券が開場と同時に配布を終了したり、終了時刻前に材料が底をつくブースがあったりと大混雑で、お昼前に来場して2～3種類の実験に参加するのがやっとというお子さんもいらっしゃいましたが、中には早朝から列に並び終了時刻まで丸々一日会場を歩き回り10種類以上の実験を体験したお子さんもいました。

各ブースでは白衣やゴーグルを着用した子どもたちが研究者さながらの真剣な表情で、様々なモノづくりや化学の不思議を体験し、会場は一日中子どもたちの楽しそうな歓声につつまれていました。

このような実験体験をきっかけに一人でも多くの“化学ファン”が誕生することを願うとともに、関係者の皆様のご協力に深くお礼申し上げます。

Responsible Care NEWS

No.83
AUTUMN

Index

VOICE 2

中央労働災害防止協会　理事長　八牧　暢行

ICCAとUNEPによる持続的発展に関するワークショップ開催 3

RCIPの展開 4

平成28年度 岡山地区会員交流会 6

RCの現場を訪ねて 8

新日鉄住金化学（株）九州製造所
信越化学工業（株）　群馬事業所

リスクコミュニケーション研修 10

第6回 四日市地区地域対話 11

「ケミカルリスクフォーラム導入編」を倉敷で開催 12

「改正安衛法対応リスクアセスメントセミナー」開催 13

TOPICS 14

RC委員会だより 16

表紙写真の説明

宝の山

暗闇の中で金銀に光り輝く、KHネオケムの「宝の山」です。

三重県にある四日市工場で製造する溶剤の品質と品揃えの豊富さは日本トップクラスで、国内外の幅広い産業分野に製品を供給しています。

KHネオケム株式会社提供

編集後記

秋が深まり冬の訪れを感じさせる今日この頃ですが、いかがお過ごしでしょうか？季節の変わり目に風邪を引かないよう気をつけたいものです。

先日、東北地方を訪れたところ、紅葉が目にしみるほどとてもきれいでした。休日にのんびりと自然の中で過ごすのもいいものですね。

RC委員会だより

☆会員動向（会員数：108 社　2016 年 10 月末現在）

退会

▶エアープロダクツジャパン株式会社（2016 年 9 月 30 日付）

☆行事予定

12月 1 日	RC活動報告会（東京）
12月13日	同上　（大阪）
12月 7 日	消費者対話（大阪）
12月14日	同上　（東京／横浜）
2 月 9 日	RC地域対話（千葉）
2 月17日	同上　（鹿島）
2 月18日	同上　（兵庫）
2 月28日	同上　（愛知）
3 月 2 日	同上　（岡山）

VEGETABLE OIL INK

UD FONT by MORISAWA

一般社団法人 日本化学工業協会　No.83　2016 年 11 月 18 日発行

Responsible Care NEWS 2016 秋季号

編集兼発行人　渡辺　宏
発　行　所　一般社団法人 日本化学工業協会
〒104-0033　東京都中央区新川 1 － 4 － 1
TEL　03 － 3297 － 2583
FAX　03 － 3297 － 2606
URL　http://www.nikkakyo.org/

編 集 協 力
株式会社 創言社
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋 4 － 8 － 13
TEL　03 － 3262 － 6275